

## 日本生理学会大会の英語化に関するアンケートの結果報告

平成18年4月26日

平16-17年度 日本生理学会 学術・研究委員会委員長 久保 義弘 (文責)  
平18-19年度 日本生理学会 学術・研究委員会委員長 白尾 智明

### 1. 序 文

平成18年3月、生理学会大会の英語化に関するアンケートを、メーリングリストで連絡しメールにて回答を求める方法と、群馬大会時に受付にて回答用紙を配布し会期中に回収する方法を併用して、実施した。ここにその集計結果を報告する。なお、アンケートの全体は、生理学会HP <http://physiology.jp/exec/page/page20060313164615/>に残してあるのでご参照いただきたい(図及び追加資料を含む)。ここでは、以下に、その趣旨説明の部分のみを紹介する。

日本生理学会・学術研究委員会では、これまでに、生理学会大会の英語化とその具体的なスケジュールを提言してきました。2009年の京都で行われる国際生理学会(IUPS2009)へ向けて、またその目的のみにとどまらず、広く海外からの参加者を受け入れることのできる態勢をつくり、生理学会大会の国際化・高度学術化を進めていくためです。そのアウトラインに従い、福岡大会、札幌大会、仙台大会、群馬大会において、各大会長をはじめとする先生方のご尽力により、導入が進められてきました。

これまでに進めてきた主な変更点は、以下の5点です。

1. 和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。

ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。

2. ポスターの記述を英語化。

ただし、演題名、氏名、所属は、英文・和文併記。

3. 特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。

4. 一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。

5. 英語一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、一部にトラベルアワードを支給。

今回、学術研究委員会では、これまでの大会英語化に対する皆様のご意見をお伺いして、今後の方向を考えるために、アンケートを行うことにしました。IUPS2009を控え、大きな後戻りはしない方針ですが、問題があれば、それを浮き彫りにして、後戻りすることなく解決するにはどうすればよいかを考える所存です。

この報告書は、3つの部分から構成される。第1は回答者自身について、第2は各質問項目についての5段階評価による回答について、第3は各質問項目についての自由意見についてである。回答総数は102通と、全会員数、および大会参加者数からすると、絶対数としてはやや物足りないものではあるが、回答者の属性、意見とも、十分な多様性を含んでおり、ごく一部の限られた方の意見というわけではないと考えられた。

## 2. 回答者自身について

回答者自身についての質問は、回答者が、生理学会会員もしくは大会参加者の全体を偏りなく反映しているものであるかどうかを探るために行った。

(1) 図1は、所属についての質問10に対する回答をまとめたものである。

医学科生理学教室が37%、医学科全体で、48%という結果であった。医学科に属する会員が全体の41%という会員委員会のデータがあるので、回答者は、やや医学科所属者の割合が高いが、概ね全体を反映しているものと考えられた。なお、この設問において、体育学部、生活環境学部が抜けている点をご指摘いただいた。失礼をお詫びしたい。

(2) 図2は、年齢についての質問11に対する回答をまとめたものである。

40代、50代の回答者の割合が高く、20代、30代の回答者の割合が、全会員における割合に比して、かなり少ない印象がある。現在ではなく、今後の生理学会を担う方々からの回答が少なかった点は残念であった。

(3) 図3は、役職等についての質問12に対する回答をまとめたものである。

教授が33%であった。この割合は、会員全体における教授の割合よりも明らかに高い印象がある。教授のみならず、教室スタッフの回答者の割合が全般に高いのに対し、大学院生の回答者は7%、ポストクの回答者は1%という非常に低い値に留まった。(2)にも関係するが、学会や大会の運営に自分の意見を反映させようという意識が、若い会員にはあまり強くないことが低い回答率の原因かもしれない。なお、この設問において、講師という分類が抜けている点を多数ご指摘いただいた。アンケート作成時の単純なミスと校正時の見落としによるもので、失礼を心よりお詫びしたい。

(4) 図4は、留学経験等についての質問13に対する回答をまとめたものである。

長期留学経験者の割合が51%と、思いの外高い印象がある。会員全体についてのデータがある

わけではないので結論はできないが、長期留学経験者のこのアンケートに対する積極性を反映している、もしくは、(3)で大学院生・ポストクの割合が低く、スタッフの回答者の割合が高いことにひきずられているのではないかと推測される。

## 3. 各質問項目についての5段階評価による回答について

質問項目1, 2, 3, 4, 5について、以下、順に記す。各項目とも、まず、全回答における各スコアの割合を示し、その後、回答者の属性に従って、分割して集計した結果を示す。分割は、さまざまな線引きが考えられるが、以下のような3種類の2分割を行った。(A) まず、英語化に対する意見に大きな影響を与えることが予想される、長期留学経験のあるものと、それ以外のものに分けた。(B) また、生理学教育等において重要な役割を果たしているが、同時に生理学会の権威的かつ排他的な旧体質という批判もある医学科生理学と、それ以外のものに分けた。(C) さらに、役職において、ほぼ半数を占める教授・助教授(シニア)と、それ以外に分けて集計した。この2分割は、いずれにおいても、両グループに十分な回答数がある。院生と非院生、研究所と非研究所等、コメディカルとそれ以外等、他の分割法も多々考えられるが、グループによって回答数がかかなり小さくなってしまいうため、ここでは行わなかった。これらの2分割のうち、下記のように、(A)、(C)では、質問によっては明確な差が見られたが、それに比して、(B)では、総じて両グループの差は小さかった。医学科生理所属の方が、他に比べて特に意見が大きく異なることはないようである。

(1) 図5は、変更点1「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。」についての質問1に対する回答をまとめたものである。

この項目については、肯定的意見(5, 4)が60%を超えており、中間的意見を加えると75%と、広く支持されている。2分割データを見ると、長期留学経験グループで肯定的意見が多いが、そ

れ以外の5グループにおいても、肯定的意見(5, 4)が、50%-65%と広く支持されていることがわかる。なお、非常に否定的意見(1)が、10%程度あるが、これについては、明確な理由がある。この点については、4.の自由意見の分析の項で記す。

(2) 図6は、変更点2「ポスターの記述を英語化。ただし、演題、氏名、所属は、英文・和文併記。」についての質問2に対する回答をまとめたものである。

この項目については、肯定的意見(5, 4)が59%で、中間的意見を加えると80%を超えており、広く支持されている。2分割データを見ると、「教授・助教授、以外」のグループで肯定的意見(5, 4)の割合が45%と最も低いが、それでも中間的意見を含めると、73%に達している。

(3) 図7は、変更点3「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。」についての質問3に対する回答をまとめたものである。

この項目については、肯定的意見(5, 4)が45%で、中間的意見を加えると60%を超えており、一応の支持を得ているものと言える。しかし、非常に否定的意見(1)が、15%あり、質問1, 2で肯定的な意見が強かった長期留学経験ありのグループにおいても13%あった点、教授・助教授以外のグループにおいては、20%を超えている点が目立っている。本アンケート中で、最も多い、否定的意見が寄せられた。自由意見を踏まえた考察を以下で行う。

(4) 図8は、変更点4「一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。」についての質問4に対する回答をまとめたものである。

この項目については、肯定的意見(5, 4)が42%で、中間的意見を加えると60%を超えており、一応の支持を得ているものと言える。しかし、質問1, 2に対する回答よりは、質問3に対する

回答のパターンに近く、否定的な意見も多く寄せられた。また、長期留学経験ありのグループにおいて経験無しのグループよりも、強い否定的意見(1)の割合が高く、13%あった点も注目される。自由意見の項で、この点を考察する。

(5) 図9は、変更点5「英語での一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、その一部にトラベルアワードを支給。」についての質問5に対する回答をまとめたものである。

この項目についての特徴は強い否定的意見の割合が総じて非常に低いことである。また、強い肯定的意見(5)の割合も高いが、(4)がやや低く、中間的意見(3)が多いことも特徴である。全体としては、広く支持されているといえる。

#### 4. 各質問項目についての自由意見について

この部分が、本報告の最も重要な部分である。問題点を具体的に浮き彫りにして、どのような対処を行うかを決定することが目的だからである。回答者の多くの方から、より英語化を徹底させるべきだという意見から、すべて日本語に戻すべきだという意見まで、非常に多種多様な意見が寄せられた。あまりに多様で総括してしまうことは原型をゆがめてしまう恐れがあり、また非常に困難なので、ここでは、肯定的意見、種々の問題点の指摘の代表的なものを紹介し、考察を行う。各意見の末尾の数字は、回答者に付した通し番号である。

【なお、日本生理学会のホームページ (<http://physiology.jp/>) に、追加資料として、すべての自由意見を割愛することなく掲載したので参照していただきたい。】

(1) 変更点1「和文抄録を廃止し、事前配布の英文抄録に一本化。ただし、演題、氏名、所属の英文、和文併記のプログラム集を、別途配布。」についての意見

(A) 肯定的意見

・抄録に関しては英文表記は避けられなくなっていると思う。演題一覧のプログラム集は学会時に大変役立つ。(73)

・参加者のほとんどが日本人という現況を鑑み

ても、演題・氏名・所属の和文併記は利便のために必要と思われる。(3)

・研究の国際公用語はやはり英語なので英語抄録のみでよいと思う。(9)

・当番幹事の手間が掛かりすぎる。英文抄録のみで可。(10)

・短い和文は意味がなかった。改善されたと思う。(13)

・英文・和文併記のプログラム集の別途配付は、是非、続けてほしい。(15)

#### (B) 種々の問題点の指摘

・意味がない。すべて和文に戻すべきである。(56)

・分野が広すぎるため、自分の分野以外の演題は日本語で書かれていても理解が難しいのに、英語だと尚更である。(47)

・少なくとも英文抄録は学会場に持ってゆかない(重い、かさばるから)、英文抄録の内容と実際の発表の内容の齟齬は問題にならないのか?その点を考えると昔の「和文抄録あり、事後英文抄録の配布。」の方が実際に近い。極端なことを言えば発表登録すれば、発表しなくても学会発表したことになる。(31)

・英文抄録は、事前には会員にしか配布されませんでした。非会員の参加者には、参加費に予め上乗せする形で抄録代を徴収し、会員同様に配布していただきたいです。また、プログラム集と英文抄録集の順番がバラバラなために対応付けに苦労しました。せめて、プログラム集に抄録集のページ番号を載せるとか、抄録集にだけある「P006」などの通し番号をプログラム集にもつけて欲しかったです。(38)

・「英文抄録に一本化」には賛成で何の問題も無いと思います。しかし、現行では、「事前配布に一本化」になっていて、“非会員で当日参加すると、抄録を受け取ることが出来ない”，また，“販売もしていない”，という現行のシステムは最悪です。現に、今大会で製薬企業から参加した非会員の方から、「この様なシステムをとっている学会には2度と参加しない。」と言われました。大会への参加者を増加させるためにも、当日参加

者が抄録を受け取れる様にすべきと考えます。(42)

#### (C) まとめ

3. のスコア集計においても見られたように、概ね肯定的な意見が多い。「英文抄録は時代の流れ、和英併記のプログラム集は便利なので是非とも必要。」というのが、平均的な認識のように思われる。ただ、具体的な問題点として(1)非会員が当日参加した場合、英文抄録を入手することができない点、(2)英文抄録と和英文プログラムの演題番号の対応が付けにくい点、(3)早い時点での英文抄録と実際の発表内容に差異があってもよいのかという点が指摘された。特に(1)については、早急に対応が必要であると考える。

(2) 変更点2「ポスターの記述を英語化。ただし、演題、氏名、所属は、英文・和文併記。」についての意見

#### (A) 肯定的意見

・oral presentationとは違い、英語の読み書きは慣れていていると思われるので、ポスターの記載は英語でよいと思います。質疑応答は日本語可は仕方ないでしょう。(2)

・国際交流のために必要であろう。(25)

・英語化の一環として適切である。(43)

・海外からの参加者が喜んでいて。(83)

・ポスター発表者が説明してくれれば、問題はない。(100)

・他の発表でも使えるので英語表記でのほうが発表者の負担も少なくよいと思う。(9)

#### (B) 種々の問題点の指摘

・本文も英文・和文を併記すべき。他人の発表は全くわからない。(47)

・要約の和文もあった方がよい。(14)

・「ポスターの記述を英語化」することには異論はないが、そうであれば「演題、氏名、所属は、英文・和文併記」することは無意味。ポスター本文の英語が読める人は演題の英語も読めるのではないか。(7)

・出来れば和文の抄録(英語抄録の和訳)も並記した方がよいと思う。(29)

・あまり関係しない分野のポスターをざっと見

ていくために、IntroductionとSummaryにも和文がついている方がありがたい。(61)

・サマリーは必ず英文と和文を共に掲示する。(75)

・日本語の抄録を廃止するのだから、発表の際に日本語のsummaryをつける様にしたらどうか。(42)

### (C) まとめ

これも、3. のスコア集計に見られたように、概ね肯定的な意見が多い。英語で表記されていれば、外国人参加者も無理なく読むことができ、日本人参加者も、日本語での説明を受ければ特に困難はない。というのが、多数意見と思われる。ただし、日本人参加者が多くのポスターをブラウズするために、題名、氏名等に加えて、ポスターにおける要旨の和英併記を求める意見が多数あった。この点は、検討する必要があると考えられる。

**(3) 変更点3「特別講演、シンポジウムの発表を英語化。ただし、質疑応答は日本語可。また、一部の教育講演、生理学教育・動物倫理等のシンポジウムは例外とする。」についての意見**

#### (A) 肯定的意見

・基本は英語であって良いと思いますが、質疑応答については確かに日本語可能な条件を残してもらえると良いと思います。質問者によっては英語により趣旨がうまく伝わらない場合も考えられますので。(1)

・発表言語の英語化は、IUPSの開催のためのみならず、国際的な関わりを深くしていくために、特に我々若い発表者にとっては、よい経験になると考えられる。反面、質疑応答が日本語可能であることが、一部のシンポジウムや発表などに浸透しておらず、却って英語を用いることが議論の妨げになっている感は否めない。このことは、参加した外国人(英語のnative speaker)の目から見ても顕著な状況のようである。(23)

・生理学会大会の国際化へのステップとして適切な選択である。質疑応答で日本語を許すというのは、英語化による「コミュニケーション不足」という問題点を回避するための現実的解決法として、有意義である。(43)

#### (B) 種々の問題点の指摘

・発表が英語であれば、質疑応答も英語があたりまえ。特に、日本語を理解できない海外からの参加者がその会場にいる場合、日本語で質疑応答したらまったく意味がない。(42)

・これまでも、presentationは日本人であっても英語でそこそこできていた。問題は、discussionである。IUSPの準備、今後の国際化を計るならば、むしろdiscussionこそ、英語で行うべきだ。(83)

・発表を英語化なら、質疑応答も英語にすればよいと思う。英語の発表で理解できない人は日本語であれ、英語であれ質問できないと思うので、どうせやるなら統一すればよいと思う。(92)

・質疑応答は原則「日本語」。「英語でも可」としてもよいのでは。(15)

・外国人の発表者であれば当然英語であろうが、日本人のみ参加のセッションで、日本人同士が英語で対応しているのは変である。(66)

・専門外でも興味ある分野について、英語での発表は理解が難しい。(57)

・学会の国際化の点から考えると大事なことはあるが、若手(新規)の学会員を増やす点からはマイナスかもしれない。(73)

・生理学会はコメディカル領域の人たちの参加を期待している側面もあり、また自分の専門領域以外の領域に付いて学ぶということもあるので、教育講演、特別講演は全面的に日本語とすべき。また、英語化したシンポジウムのスライドには、1行程度の日本語サマリー(字幕)をいれることを演者に要望すること。このサマリーは大いに役立つと思われる。すでにそうしている人があって、自分の専門領域外の話も良く理解できたので、有効だと思われる。(5)

・学会の活性化に逆行する。特にシンポジウムは他分野の研究概要を理解する絶好の機会と考えられます。これでは学会に参加する魅力が失われてしまう。(6)

・学会の意義の一つは、自分の専門外の仕事を知って、仕事のヒントにすることがあると考えます。これをbroken Englishでやられると、つい

ていけません。パワーポイントの図表はポスター同様、すべて英文とし、簡単なfigure legendをつけることを義務づければ、口演自体は日本語でも可とすべきと考えます。将来、外国人も役員になる可能性を見越し、来年度から役員会の討議をすべて英語でされますか？ (29)

#### (C) まとめ

かなり、多様な、明確に相反する意見が出されている。一方で、discussionも、すべて英語にするべきだという意見があり、また逆に、他分野の概要をスムーズに理解するために日本語発表にしてほしいという意見、日本人同士が英語でdiscussionしているのは変だという意見があった。

3. のスコア集計でみられた15%に達する強い否定的意見は、特別講演、教育講演、シンポジウムは他分野の理解のよい機会であるのに、英語が理解の障害になっているということを反映していると考えられる。

全体としては、英語での講演はよいが、十分なdiscussionを行うために、日本語のdiscussionを許容すべきだという見解が多かった。discussionは日本語でかまわないという点が、充分伝達されていなかった会場もあるようなので、今後、この点をより明確に周知することが必要だと考えられる。また、英語発表の場合、理解を助けるために、スライドに和文のサマリーを一文入れるようにしてはどうかという意見もあった。検討に値すると考えられる。

**(4) 変更点4「一般演題のうち、発表者が英語での口演を諾とするものの中から、プログラム委員会が選抜して、英語での一般口演のセッションを実施。ただし、質疑応答は日本語可。」についての意見**

#### (A) 肯定的意見

・一般口演は全て英語発表にして良いと思います。大学院生や留学前の研究者にとっても英語発表や英語での質疑応答をトレーニングする良い機会だと思います。このような機会があることにより、普段から心構えが変わってくるのではないのでしょうか。(40)

・シンポジウムをオーガナイズできないが、口

演で発表したいという若手研究者は多数いると思われる。事実、本大会でもこれを希望する研究者が多数あった。これらの若手が英語で発表する機会をもつことは、生理学学会大会、生理学学会会員の国際化に貢献すると思われる。今回の招待講演者の一人である、Dr. Roger A. Nicollもこれを、「若手研究者の国際化へのステップ」として高く評価していた。質疑応答で日本語を許すというのは、英語化による「コミュニケーション不足」という問題点を回避するための現実的解決法として意味がある。(43)

・口頭発表において、十分な英語力を皆がもっているとは考えにくいです。条件付や発表者本人の了承において英語口頭発表セッションを設けることには賛成です。(1)

・多くの人が英語での発表の体験〔訓練〕ができたと思う。その趣旨に沿って今後も続けた方がよい。ただ、今回はポスター発表と重なっていたのでこまった。(34)

・ポスターが選択できるので、これでよいのではないか。(69)

#### (B) 種々の問題点の指摘

・質疑応答も原則英語にするのがよい。(84)

・全演題を英語にすべきと思います。質疑応答も原則すべて英語が良いと思います。もし、演者と質問者の意志疎通がはかれない場合は、座長が責任をもって、通訳(日本語と英語)等の措置をとれば良いと思います。座長がしっかりとすべきだと思います。今回の前橋の生理学学会大会でも会場からの質問が無いにもかかわらず、最初から最後まで全く質問しない情けない座長もいました。(41)

・この場合もスライドには、1行程度の日本語サマリー(字幕)を入れることを演者に要望してはどうか。(5)

・外国人の参加するセッションについては英語口演は当然のことと考えますが、日本人のみのセッションでは支障を生ずることもあり、日本語での口演が望ましいと考えます。(8)

・質問3と同じ理由。すなわち、学会の意義の一つは、自分の専門外の仕事を知って、仕事のヒ

ントにすることがあると考えます。これを broken English でやられると、ついていけません。パワーポイントの図表はポスター同様、すべて英文とし、簡単な figure legend をつけることを義務づければ、口演自体は日本語でも可とすべきと考えます。一般口演はシンポジウムよりいっそう専門的な話題となるので、よけいに専門外の人への参加を拒んでいる結果となっているように思われます。(29)

・これについても発表者に事前に良く周知しておけば問題ありません。群馬大会の場合、文書的な通知がどこにもないままに、「原則は英語」とHPに記載されているだけです。初めて、あるいは久しぶりにこの学会で発表する者には、非常に唐突な印象を与える。前の質問同様、現時点では圧倒的に日本人が多い上に、準備に手間がかかるので、それほど意味があるとは思えません。つまり、このことにより学会が活性化したり、国際化するとは思えません。(20)

・英語のセッションだけでなく日本語が認められるセッションがあっても良いと思う。特に理論より技術的なものは、技師、技官、技術補助員など日本語のほうが理解がより深く出来ると思うので。(66)

#### (C) まとめ

この点についても、質疑応答まで英語化という意見から、口演自体を日本語でという意見まで、さまざまな意見が寄せられた。おおまかには、群馬大会での方針は支持されているようである。平均的な意識を探ると、英語での一般発表は大変だったが、やっただけの意義はある。英語での口演を希望しない発表者はポスター発表を選択することができるのであれば不都合はない、というのが全般的な印象である。

**(5) 変更点5「英語での一般口演のセッションには、外国人の発表演題も公募して、その一部にトラベルアワードを支給。」についての意見**

#### (A) 肯定的意見

・国外からの参加者が増えることは望ましい。折角海外から参加してきた人々が十分に質疑応答に参加できるよう、また、不便な思いをすること

の無いよう、今後も主催者側の努力をお願いしたい。(40)

・是非、継続・更なる拡充を希望します。演者紹介時に、座長が受賞口演である旨をはっきり聴衆に告げる（もしくはスライドで表示する）ことを義務づけると良いと思います。(32)

・生理学会大会の停滞状況を打開するために、アジア地区を中心とした外国の研究者の大会への参加を本格的に検討すべき時期に来ている。今回の試みはその意味でも貴重であった。また、英語化の意味を実質化するためにも、今後も継続し、できれば規模を拡大すべきである。(43)

・外国人の学会参加を促すためには必要と思う。(73)

#### (B) 種々の問題点の指摘

・外国人研究者の参加を金銭面でサポートすると、実質的には、発展途上国の恵まれない研究者の援助の色彩が強くなるのではないのでしょうか？むしろ、数は少なくとも、外国からの優れた研究者の招待講演を企画する方が、魅力的だし、参加者も多くなるのではないのでしょうか。(2)

・海外から進んで日本まで発表しにやってくる外国人研究者はあまりいないと思われる。また、トラベルアワードを支給しても、参加人数の点からあまりコンピティティブにならず質の高い研究の発表も聞けないと思う。海外に出ている若手日本人研究者に自分たちの仕事を日本で発表させる機会を与えることもトラベルアワードの意義に拡大するなら、応募数も多くなり、人材育成の点からも大きな意義があると思う。(3)

・英語の口演にトラベルアワードを出すならば、日本語での一般口演参加者にもトラベルアワードを出すようにすべき。特に大会開催時期が通常の3月末だと、航空券の割引等が使えないことが多く、日本からの参加者にも多額の出費が伴うことがある。(42)

・その一部というのをどういう基準にするか？またトラベルアワードは国内の若手の参加者も望んでいると思うがなぜ外国人の発表演題のみのそういう制度を設けるのか？(13)

・その必要はない。外国人に対して優遇措置を

執る必要性などないと思います。(20)

・現時点での中国人等の発表内容の質が、JPSに通らないようなものが多く、トラベルアワードを支給してまでの意義を感じないが、今後このレベルで推移するかどうかは不明。過去3年間にJPSに掲載された(当然in pressを含む)論文の著者であることをトラベルアワード支給の条件にする等の改善方法が望まれます。(29)

・今回発表した外国人のレベルが低かったのは問題であった。(84)

・九州・沖縄や北海道などの遠隔地からの『優秀な若手』研究者への国内発表への一部補助についても考慮されては如何ですか？(15)

#### (C) まとめ

スコア集計では、非常に否定的な意見は少なく、広く肯定的に受け止められている印象であった。しかし、自由意見では、さまざまな意見が記されていた。海外からの参加を促すという意義を高く評価し、今後の拡充を求める意見がある一方で、外国人だけを特別扱いするのは変で日本人にも与えられるべきだ、その資金を用いて優れた招待講演をさらに充実させるべきだ、学術レベルが低いのが問題だ、といった意見が見られた。スコア集計にみられるように全体としては前進するべきだと考えられるが、指摘された点は検討に値する。

(6) 質問6「大会英語化に伴うデメリットとして、発表内容の理解や意志の疎通が不十分になってしまう可能性のあることがあげられます。これ以外に、どのようなデメリットがあるでしょうか？(例：結果として、門戸がせばめられ、参加者数が減少する。)」についての意見

(A) 特に危惧する点はない、もしくはやむを得ないという意見

・質疑応答はシンポジウムを含め全て日本語可とすることで特にデメリットはないのでは。(14)

・英語使用は推進せざるをえない。将来は生理学会の東アジア各国との共催も考えるべきか。あるいは、薬理学会との共催にして日本のみの開催を維持する道を選ぶか？(17)

・現時点ではそのようなデメリットが考えられます。しかし、若者たちの英語や外国人に対する

コンプレックスがなくなりつつあるので、英語化そのものは推進しても良いと思います。しかし、それと国際化や学会の活性化は別の問題である。外国人や留学生に対する考え方を変えない限り、何も変わりません。(20)

・英語がそんなに大きな障壁になる研究者は所詮活躍の場がないわけですから、淘汰されて行くのではないのでしょうか？参加費の減収は大問題ですが…。英語化のトレンドは他の学会でも同じこと。止むを得ない場合には日本語でディスカッションできる余地を残しつつ、論文のみならず口頭発表も英語が基本…という常識をどの学会が先行して定着できるかということではないでしょうか？(40)

・特に問題は起こらないと思います。若い人は特に英語が上手です。(51)

・心配されるほど、英語の発表がわかりにくくはないようです。みな英語力が向上しているせいでしょう。(67)

・若い研究者であるほど我々世代に比して英語に対するアレルギーが少ないと思います。(93)

#### (B) 種々の危惧を指摘する意見

・英語で発表することに不慣れな大学院生が、大会を敬遠してしまう危惧があるように思われる。(3)

・結果として、門戸がせばめられ、参加者数が減少する。とくに学部学生や教育専門の大学等の教員にとっては敷居が高くなる。(5)

・コメディカルや医学修士の連中に目を向けさせたいなら、大きなネガティブ要因になっています。私の大学のコメディカルの連中は、学会の英語化に反比例して参加しなくなっております。自分の専門外の口演を聞こうとする会員(特に若い人)がどのくらいいらっしゃるのかわかりませんが、私のように、それを大きな参加目的とする者にとっては大きなデメリットであることは事実です。(29)

・今後生理学会大会参加者をコメディカルの方々に拡大することを本格的な方針とする場合は、敷居が高くなり、参加者数が減少する可能性はあるかも知れない。(43)

・生理学会の敷居を高くし、日本人初学者や他分野からの参加者が減少してしまうことが懸念される。発表者の英語能力は向上していると思う。しかしながら、大学・大学院入学者のレベルは残念ながら低下傾向であり、大学では多様化（二極化）した学生への対応措置が必要になっている。現状では、英語化は多少無理な背伸びのように感じる。私は、生理学会に限られた（エリート）集団の集まりに閉じることを恐れる。しかし、学会員の国際化・レベルアップを、学会の拡大や医学会・日本社会における理解者増より優先するというのが学会としてのコンセンサスであるならば、ある程度のデメリットには目をつぶるという判断があってもよかる。 (33)

・英語発表の準備に時間が取られる。 (91)

・折角、生理学会として幅広い研究分野の人が集まって発表しているのに、英語が不得意だと他分野の発表が日本語でも苦勞するのに英語だと全く理解できなくなる。それにより、他分野の発表を見たり、聞いたりすることによる、新しい知見が得られなくなり、もしかしたら、自分の研究に応用出来、ブレイクスルー出来るかもしれない可能性がなくなる気がする。 (92)

(C) まとめ

英語化の最大のデメリットは、やはり、発表の理解や意志の疎通が不十分になること、その結果、大会参加者が次第に減少し、学会が勢いを失う可能性があること、と要約できよう。(英文論文執筆を通常のゴールとしているわけではない) コメディカルの方々において特に大きな問題となる、院生レベルにおいて理解に困難がある、といった危惧が示される一方で、若い人たちが英語を強く敬遠することはない、心配するほど英語の発表はわかりにくくない、科学の世界では英語は基本とするのは当然だ、といった意見も見られた。コメディカルの方々を含めて生理学会が発展していくためにはどうすればいいかは、今後も検討を重ねる必要のある課題である。

(7) 質問7「それらのデメリットを解決するためには、英語化を後戻りする以外にはどのような方策があるでしょうか？(例：大学院生の発表のトレーニングの場として、地方会の充実をはかる。)」についての意見

(A) 種々の意見

・即席的なことは困難。他の学会とともに国に対して諸外国のように英語を第二国語として教育していくように強く求め、早期実現を目指していく。(65)

・各教室での日常発表、討議を通じて訓練してもらえない。(10)

・各教室単位に啓蒙して、出来るだけ英語になれる機会を作って頂く。(23)

・国際的レベルで活躍できる研究者を育成するしかない。海外での学会に積極的に出て行けるトラベルグラントを生理学会でも提供する。また、宣伝活動も活発にする。機会を多く経験すれば、英語の発表、討議になれるのは早い。地方会まで一気に英語化すると参加者が減るのではという危惧を抱く。(13)

・英語論文の投稿と同様、国内学会での口演も英語化の時代であると認識し、各々が英語で話す・聴く能力を高める(ように努める)。口演の英語がまずくても内容が理解できるよう、提示スライドを分かりやすいものにする。(21)

・プレゼンテーションのスキル(英語での発表力を含めて)が向上するような活動を学会としてする。セミナーをやる、本を出す、抄録集に提案を加える。(34)

・スライド(パワーポイント)の作り方を工夫するように(理解しやすいものにする)、奨励例を学会が提示する。こういうことは英語化に拘わらず、プレゼンテーションのスキルアップに大きく貢献する。(96)

・地方会の活性レベルは地区ごとにより差があるようですが、地方会を大学院生のトレーニングの場として英語化推進に活用することには賛成です。(40)

・地方会でのトレーニングは重要と思います。(51)

・大学院生の発表のトレーニングの場として、地方会の充実を図る。(68)

・地方会での口頭発表を充実する。(74)

・将来は生理学会の東アジア各国との共催も考えるべきか。あるいは、薬理学会との共催にして日本のみの開催を維持する道を選ぶか？(17)

・せめて教育講演だけでも日本語にさせていただきたいというのが正直なところ。日本語の抄録を用意し、大体の内容が先にある程度、容易にわかるようにしてもらえると少しは助かると思う。英語化するのであれば、結局、本人の努力で不自由のないようにするしかないような気がします。・・・それに対して学会として何かをあえてしようとするのであれば、教材、辞書などを作成することも検討してもいいかもしれない。(82)

・せめて、ポスター発表では、英語と日本語の併用にしてほしい。国際化と数年前からいっているが、実際、参加している外国人は1割にも満たない気がする。それならば、日本人同士気軽に発表出来、意見交換しやすいような環境も作っておいた方が良くと思う。(92)

#### (B) まとめ

アンケート質問の後に付加した「例」の意味は、「大会の英語化・高度学術化が進むと、大学院生がはじめて発表するトレーニングの場としては厳しい感があるので、それを補うものとして、地方会を充実させて、日本語で発表し、日本語での徹底的な質疑応答によって発表の基礎を鍛える機会とする。つまり、大会と地方会（トレーニングの場）で役割を分担し、どちらも大切なので地方会のさらなる充実をはかる。」というものであった。しかし、表現が不十分であったため、地方会で英語発表の訓練をするという意味に解釈された方が多かった感がある。いずれにしても、鍛錬の場としての地方会の重要性は広く認識されているようである。その他、英語でも分かりやすい発表ができるよう、プレゼン法、スライドの作り方を工夫する、その講習を行う、等の意見が見られた。また大会において、限定的に日本語の部分を求める意見もいくつか見られた。

(8) 質問8「英語化は、大会の国際化を通して、大会・学会の発展をはかることを目的としています。大会の国際化のために、英語化以外にどのようなことを行えばよいでしょうか？(例：海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。)」についての意見

#### (A) 種々の意見

・日本から良い研究がどんどん発表される事に尽きる。(14)

・なぜ、日本の学会を国際化しなければいけないのか理解できない。国際学会は国際学会である。例えば、我々が中国の生理学会に英語化されたからといって参加したいと思うだろうか。その国の学会はその国の言葉でやり、その国のその分野(生理学界であれば生理学)の横のつながりを強くし、若手を育て、国としての底上げをすることが目的であるべきである。(35)

・どんなにがんばっても、SfNのようになれるわけでもなく。規模は小さくても深くディスカッションできる場の方がどれだけ日本の科学発展にとって有益かが判っていない。(90)

・アジアの国際学会もある中で、国際化、それも例題のように餌で釣って外国人の参加を増やすことで国内大会が発展するという考え方自体がおかしいと思います。国内の参加者により魅力あるものとし、発展させて行くことで、自ずと外国からの参加も増えると思います。トラベルグラントを出す金銭的余裕があるのなら、もっとみんなが話を聞きたい一流の研究者を招待して、口演していただく方にまわすべきだと思います。また、日本生理学会が主催する国際学会を別に作るというような考え方は無いのでしょうか？(29)

・海外からの参加者のためにトラベルグラントをさらに拡張することは不賛成。(52)

・海外からの参加者のためのトラベルグラントをさらに拡張する。(68)

・アジア地区の研究者の参加を促進するための、より組織的な取り組みを行う。2009年IUPSをその契機とする努力が望まれる。(43)

・FAOPSや近隣各国の生理学会との連携。(67)

・生理学での韓国のレベルが良くわからないのですが、日韓で共催として生理学会（あるいは生理学会のサテライト学会）を隔年で日本、韓国で開催する。準備から発表まで英語で行わざるを得ないので英語化にはうってつけではないか。韓国での開催なら、日本とほとんど旅費や滞在費は変わらないのでは？ (2)

・国際化にはやはり、英語化が必須だと思います。多少困難がありますが、ある程度のコストをかけてでも英語化は必要。英語化以外となると、その時代のトピック、ノーベル賞受賞者講演、話題の人物を呼び、この講演情報を近隣諸国に流し、その近隣諸国からの参加者を増やす努力を続けるのはどうでしょうか。(12)

・国外からの参加者を増やす点では、学術的な視点でなくて恐縮ながら、学会開催地を国外からアクセスのしやすい大都市、あるいは国際的に有名な観光地を近くに擁する都市にする。(そうすると国際的知名度の低い地方都市での開催は難しくなる・・・) (21)

・英語のホームページを充実、海外への姉妹サイトにリンクさせる。(93)

#### (B) まとめ

優れた研究が出されることが何より大切という意見はそのとおりであると考えられる。それ以外に、韓国等のアジア近隣諸国との連携、優れた特別講演のさらなる充実、(賛否両論あると思われるが) アクセスのよい大都市での開催、広報の充実等の意見が見られた。トラベルグラントについては、両極の意見があった。また、母国語で行い国としての底上げを目指すべきだという国際化を目指すこと自体に対する強い否定的意見も見られた。

(9) 質問9「学会、大会の活性化と発展のためのお考えをご自由に記述下さい。(例：やみくもに会員数を増やせばよいというわけではない。)」についての意見

#### (A) 種々の意見

・生理学雑誌68巻1号に小泉周氏が「Vision」で書いておられた最後のポイント、医学部出身者による運営や発想が主体だと言うことを強く感じ

ます。特に私は理学部出身で歯学部長い間おり、また、理学部に戻った者ですが、歯学部時代にもこのことを強く感じていました。現在医学部や歯学部から他学部出身者が減少しつつあると思います。学会がこれまで通り、医学部出身者を中心に発展をお考えでしたら何も言うことは有りませんが、医学部外の会員を取り込もうとお考えでしたら、このあたりの発想から変える必要があると思います。たとえば、理学部出身者にも科研費がもっと当たるようにするとかです。しかし、一方で、「神経科学会」などどのように差別化を図るかも重要な課題だと思います。(20)

・国際化も大切ですが、その前に国内の生理学関連分野の人が広く集まることのできる場にする必要があると思います。現在の英語化は、単に現在参加している会員のレベルを変えることに主眼があり、(今回もポスターにあった)「生命の理に興味を持つ人」を集められない体質の変革には寄与できないでしょう。生命科学全分野からの参加を促す方策を考える、さらに学部学生のみならず中学高校生および教員の参加を積極的に推し進める(トラベルグラントや賞など)方策もとる必要があるのでは。そもそも、日本医学会に所属する学会だからといって、アンケートのように質問10医学部の生理とその他の学部を分ける必要があるのでしょうか？生理学が「生命の理」を学ぶ学問であることを標榜するならば、生命科学系全ての学部・学科に生理学は必要ではないでしょうか。その意味で生理学はもっと(politicalではなくScientificに)生命科学系全体に拡充する必要があります。このように「医学部」にいつまでもこだわっていると、他学部・学科系から「生理学」は医学部のもので、自分たちには必要が全くないという誤解を与えたいと思います。質問10は、その意味で別の尋ね方をすべきでした。(32)

・学会の会員動向を示したグラフを見たが、学会員は減少傾向にある。また「生理学教育と研究における問題と提言」に記載されているように生理学教員の削減も進行している。言うべきことを主張し、提言を行うことや、各大学での教員の生理学教室の規模維持のためのはたらきは重要であ

ろう。一方、学会の会員動向グラフは会員の過半数が医歯系以外であることも示していた。生理学会をどのような人たちの集まりにすることが望ましいのであろうか？高レベルの医歯系専門化集団を望むのか、広さを求めるかの判断は重要であろう。生理学は決してとっつきやすい学問ではない。教育の底が低下し、学問においても即有用な実用性重視の社会的流れの中で、(あえて突き放したひどい言い方をするなら)生理学者は居場所をはっきりしたことを言わないおたく人間と見られかねず、敷居が高めな生理学に参入しようとする学生を増やし、学会の縮小傾向を反転させることはたやすいことではない。少数精鋭主義ならば、学会の縮小や英語化に対する懸念には目をつぶってもよいように思う。しかし、もし学会を大きくすることが重要であるならば、学会をより敷居の低い気軽な雰囲気のある会にし、医歯系以外の参加者増のための努力等も検討すべきかもしれない。また大会の英語化は、現状では学会規模の拡大のためには結構重い足かせになっているような気がする。(33)

・中国人などの外国人ばかりを見ず、もっと、国内の医学科を中心とした大学教員以外に広く門戸を開き、参加しやすい環境づくりの方に目を向けるべきです。また、最近急増している医学科修士学生もターゲットとすべきです。地方会はレベルが低すぎる上、地域によっては専門内容に偏りが顕著で、こういった連中にも魅力があまりあるものではありません。面白いネタは必ず本会に再登場するようですし、これを禁止すれば、いよいよ地方会のテーマが貧弱になるばかりです。トラベルグラントはこういった連中にこそ出すべきと考えます。(29)

・20-30年前には大きな大学医学部の教授たちが学会運営の中核を占め続けていた(少なくともそういう印象を与えていた)のにくらべて、幹事の構成を見ても、そうでない人達を中心になっているし、医学以外の分野の人達がどんどん加わってきている。その動向をもっと強く受け止めて、その人達が自分の主たる活動の場として生理学会を考えられるような魅力を持たせるべきだろう

か。医学部で正統の生理学を進んできたものとして、残念な思いがないわけではないが、コ・メディカル分野の広がり、理学系の人達の流入が現実である以上、これは当然の流れと考える。(61)

・1. 医学部出身者のための学会というイメージを払拭すること。生命科学を研究するあらゆる研究者に広く開かれた学会であることを実質化するような学会運営を行うこと(例えば、教育委員会の取り組みなどはnon-medical life science studentsも視野に入れて企画する)。2. アジア地区の研究者が多数参加する学会大会とするための工夫を行うこと。(43)

・生理学会は、NO学会・Dahl rat学会などのようにテーマを絞った学会ではない。その分、話題性による参加者牽引力は低い、同時に時代によって変遷テーマの波に巻き込まれない。逆に言うと、その時代の興味に見合ったテーマを設けることで、参加者の吸引力が出せる。この点から、その時代のトピックを牽引する中心人物を講演者に呼ぶ、という考えですが、既に行われていますね。問題は毎年そのようなトピックとそれを牽引する人物が現れない、ということでしょうか。しかし、毎年、ノーベル生理学賞、ラスカー賞、などが選出される訳ですから、1~2年遅れでもこういう方々をお呼びするのは一案でないでしょうか。単発の論文的な研究発表も重要ですが、最近の嗜好傾向は、まとまった研究ストーリーを聞いてその分野のガイドラインを勉強して、自分の研究室に帰りその新しい情報を何か(自分の研究分野や教育内容)に利用する、という方向にあるのではないのでしょうか。こういう点から、十分なシンポジウム(一人30分位で5人くらい、質疑応答を入れて、合計3時間位)を中心に学会を運営するのはどうでしょうか。確か、2001年に京都で行われた生理学会がそのパターンを採り、評判が良かったと思います。シンポジウム・テーマは広げすぎないようにし、シンポジウムした限りはそのテーマでは充分議論してもらおう、というやり方の方が、参加者が増えると思います。単発論文の口頭発表は、かなりテーマを絞って、反論が渦巻いている時代のトピックを3つぐらい取り上

げ、1日に1つずつ熱く議論してもらおう、というのが参加者が集まるといいます。そのためには、大会主催者がどういう点が議論的になっているか、誰がその理論や説の中心人物であるか、などをアピールする宣伝する文章を發表する必要があります。以前、シドニーで、ネットワーク説とペースメーカー説をテーマに小さな学会が構成されたことがありましたが、会場は大変な熱気でした。(12)

・やはり、生化学学会など他の学会との合同開催の時のほうが学会は盛会となるのではないのでしょうか。開催地はできるだけ大都市としてアクセスがいいほうが助かります。生理学の学会参加者なら、あたりの観光を目的の人は多くないような印象があります。それと、これは理想論ですが、学会誌が high impact journal になれば自然と活性化する気がします。Genes to Cellsの生理版は難しいのでしょうか？(2)

・海外の研究機関にポストに出ている多くの若手日本人研究者をひきつけるような取り組みをしていただきたい。たとえば、国内でポストを見つけたきっかけ作りとなるような特別な場を学会が提供していただくなど。(3)

・数年に1回ほど、他の学会と共同開催。(44)

・(1) いくつかの session に native speaker で顕著な生理学者を招いて discussion を盛んにする (Journal of Physiological Science の外国人 editor を招くのもよいかも知れません)。(2) 他学会との Joint Symp は継続する。(72)

・ホームページの最近の充実ぶりのような、広報活動が重要。(14)

・学会場の選定を慎重に行うべきだと思う。他県・他国からの交通網、学会場内での移動 etc を踏まえて決めた方がよいと思います。(73)

(B) まとめ

例としてあげた、やみくもに会員を増やせばよいというわけではないという一文が議論を刺激したようである。高度学術化・国際化を目指す路線と、広く会員層を広げることが、相反する点があることも事実である。久保の私見としては、日本生理学会が医学科生理を中心とした権威的、排他

的集団であるとは感じない。医学系の生理学者が、他学部からの新しい参加者を歓迎し、生理学の発展につながるものと喜びこそすれ、それを拒む気持を持っているとは考えられない。いずれにしても、出身学部にとらわれず、生理学に関心をもつ人々が広く生理学会の活動に参加できるように学会運営のあり方に一層の工夫をこらすことが非常に重要であることは疑う余地がない。

難しい点は、端的な表現として、「英文論文発表を研究のまとめとしている研究者」と、「そうでない分野の方々」との目指すところのギャップであろう。前者の場合、英語発表ができなくてはすまないが、後者はそうではない。両者が共存して充実していくことは、確かに難しい問題であると感じる。地方会を有効に使う、特別なプログラムを用意する等の考慮が必要かもしれない。

その他の意見としては、焦点をあてた厳選されたテーマについての十分なシンポジウムの実施、院生の参加の促進、海外からの参加者の促進、他学会との乗り入れや合同大会の実施、ポスト探しの機会の提供、大会開催地の考慮、広報の重要性などがみられた。

寄せられた意見は、まさに多種多様であり、ここで簡単に要約することはできない。【ぜひ、日本生理学会のホームページ (<http://physiology.jp/>) からダウンロードできる追加資料の全文もお読みいただきたい。】

## 5. 全体のまとめ

(1) 回答数は102であった。

(2) 回答者を所属別で見ると、会員における割合に比し、おおきな偏りはなかった。教授、長期留学経験者の回答者の割合が会員における割合より高く、院生を中心とする若い世代の回答者は低かった。

(3) スコア集計において、質問1「英文抄録」、質問2「英文ポスター」、質問5「外国人トラベルアワード」については、広く支持を得ていた。

(4) スコア集計において、質問3「英語の特別・教育講演」、質問4「英語の一般口演」についても、肯定的な意見がまさり、一応の支持を得

ていた。しかし、質問3において、強い否定的意見が他の質問項目よりも多かった。英語化が、他分野を概観することの障害となることを反映していると思われる。

(5) 「抄録」については、非会員参加者が英文抄録を受けとることができない問題点が指摘され、対応が必要と考えられる。

(6) 「ポスター」については、要旨の和文・英文併記を求める意見が多く見られ、検討に値すると考えられる。

(7) 「特別講演」、「一般口演」については、討論の充実のため、日本語での質疑応答が必要であるという意見が多く見られた。討論は日本語でよいことを、より明確に周知する必要があると考えられる。

(8) 「トラベルアワード」については、海外からの参加を促すという意義を高く評価する意見がある一方で、日本人にも与えられるべきだ、学術レベルが低い点が問題だ等の意見も見られた。全体としては、前進するのが妥当だと考えられる結果であった。

(9) 質問6「英語化のデメリット」については、発表の理解や意志の疎通が不十分になること、その結果、門戸がせばめられ、大会参加者が減少する可能性があることが最大の問題のようである。「英文論文を成果発表方法としている方々」と、「そうでない分野の方々」との目指すところのギャップは、確かにあるので、両者が共存して、学会大会を実りあるものとするために、さらに検討を重ねることが必要であると考えられた。

(10) 質問7「デメリットに対処する方策」については、若手等のトレーニングの場としての地方会の充実は、支持を得ている感がある。それ以外に、英語でも分かりやすい発表ができるよう、

プレゼン法を工夫する、そのための講習を行う等の意見、大会のプログラムにおいて、限定的に日本語のセッションの設置を求める意見も見られた。

(11) 質問8「国際化のための、英語化以外の方策」については、近隣諸国との連携、優れた特別講演のさらなる充実、アクセスのよい都市での開催、広報の充実等の意見が見られた。トラベルグラントについては、(8) で記したように、両極の意見があった。

(12) 質問9「学会活性化の方策」については、医学科生理を中心とした医学系の学会であるという旧体質の打破と他学部からの参加の促進、に関する意見が多数寄せられた。広い生命科学分野からの参入の促進、さらに、院生の参加の促進の重要性は、広く認識されていた。一方で、方策については簡単に要約できないが、学術的に魅力ある大会プログラムのさらなる充実、他学会との連携の促進等の当然のものに加えて、ポスト探しの機会等のメリットがある大会にすること、国内外のトラベルアワードの重要性、広報の重要性等の具体的意見、国の初等教育の改革に関する意見が見られた。

## 6. 謝 辞

お忙しい時間を割いて、貴重なご意見をお寄せ下さった皆様に心より感謝申し上げます。また、メールでのアンケート回収にご協力下さった生理学会事務局の方々、用紙での回収にご協力下さった群馬大会大会長の小澤滯司先生、事務局長の鯉淵典之先生をはじめとする方々、データ整理にご協力下さった生理研・神経機能素子の山本友美氏をはじめとする方々に、感謝いたします。どうもありがとうございました。